

## 片岡の「太子道」

斑鳩宮で薨去された聖徳太子（厩戸皇子）の遺体は、母である間人皇后が葬られている河内の磯長へと運ばれたと伝えられ、その道は「太子道」と呼ばれている。その道は斑鳩から大和川を越え、低い丘陵の続く片岡山の山裾を縫うように南へ向かい、二上山の北麓、大坂道の古道に合流して穴虫峠を越え、磯長谷の廟所に向かう道である。

厩戸皇子が亡くなるのは622年の2月22日、母の間人皇后はその前の年に斑鳩の中宮（後の中宮寺）で、厩戸の妃や王、王女たちに見取られて亡くなった。60歳はゆうに越えていた筈である。

間人皇后の殯宮は中宮の南に造られた。柵で廻りを囲い、悪の鬼神を追い払うために柱を建て、柱の上に木彫りの鳥が置かれた。鳥は皇后の魂を天界へと運んでくれるのだ。

年が明けると、今度は厩戸皇子が病魔に取り付かれた。発熱し病床の身となった厩戸は、斑鳩宮から富雄川の岸のあくなみのみや飽波宮に移された。飽波宮に住む妃のかしたのいらつめ膳郎女の申し出であった。長く厩戸に尽くし、八人の子を産んだ彼女は、侍女や近習を遠ざけて何日も眠らずに看病した。その甲斐があって厩戸の病は小康状態に入った。

ところが、今度は膳妃に病魔が移り、間もなくして彼女は亡くなった。厩戸は自分の床の横に妃の床を延べ、静かにその手を握って妃を見送った。そして次の日、厩戸自身も息を引き取った。

厩戸皇子の殯宮は飽波宮の東に築かれた。そこは大和川に近く、廻りを蘆に囲まれた水辺にあった。そこには膳郎女の遺体も安置された。人々はその場所を葦垣宮と呼び、その水辺の宮から二人が手を携え、御仏の元に旅立つことを願った。

聖徳太子が亡くなった時のことを、日本書紀は次のように伝えている。

この時、諸王、諸臣、および天下の人民は、老いたものは愛児を失ったように悲しみ、塩や酢の味さえも分からぬほどであった。若きものは慈父、慈母を失ったように、泣き叫ぶ声はちまたに溢れた。農夫は耕すことも休み、稲つく女は杵音もさせなかった。皆がいった。「日も月も光を失い、天地も崩れたようなものだ。これから誰を頼みにしたらよいのだろう」と。

太子の遺体が斑鳩から河内の磯長の地に運ばれるとき、人々は片岡の丘を埋め尽くし、鐘を鳴らし笛を吹いて太子を見送ったであろう。それは太子の魂が迷わずに、黄泉の国へ旅立つようにとの人々の祈りである。

聖徳太子の墓所である叡福寺には、太子の母の間人皇后もともに埋葬されていると伝えられている。それが太子の意思か、皇后の希望が分からないが、当時は夫婦の合葬よりも、親子が合葬されるほうが多かったはずで、さほど不思議なことではない。

しかしそこには、妃の膳郎女もともに埋葬されており、その墓は三骨一廟と伝えられる。聖徳太子母子にくらべ、妃とはいえ身分の低い膳妃と一緒に埋葬されているとは考えにくい。これは後の人々がともに旅立った夫婦を引き離すことが出来ず、作り上げられた伝承なのであろうか。



（死者の魂を天界に運ぶ鳥）

## 太子道の乳垂地蔵

乳垂地蔵（ままだれじぞう）は、推古天皇が乳母の乳が少ないことを悲しんで、この地蔵に使いを送って祈願させたところ、乳母の乳がたくさん出るようになったという伝承のある地蔵です。かつてはそばに柳の木があり、参詣にきた婦人がここに母乳がよく出ると乳をかけて祈願していたので、柳は乳で白くなっていたといわれます。